

埋め込まれた時制のパズル： 時制の De Se 分析

山森 良枝

(同志社大学)

1. はじめに

人称代名詞や「ここ・今」等の indexical は、その指示対象/意味が文脈依存的に決定される。こうした文脈は“評価の文脈”(context of evaluation)と呼ばれ、indexical 同様、当の発話が誰のパースペクトに基づいて記述されたかを知る上で重要な要素である。そのため、Kaplan(1989)が“only in a given context of utterance the reference of the indexical items can be determined.”とくパースペクトの一貫性を求めているように、他者の信念や発話を報告する信念文や報告文では、信念や発話を内容とする被伝達部も報告者の視点から現実世界の出来事として記述されることになる。

しかしながら、自然言語には「昨日、田中君は今日自分の家から行くと僕に言った」のような文があり、間接話法の中に被伝達部の元発話者<田中君>による一人称発話を再現した直接話法が混在する<混合話法>(mixed quotation)も存在する。元の発話をそのまま再現する直接話法の報告文が *De Dicto* 報告文であるのに対して、間接話法の形式を持つ報告文は、混合話法に対応する *De Se* 報告文と、被伝達部が報告者の視点から現実世界の出来事を記述する *De Re* 報告文の2つに分類される。信念文や報告文は、「x believes/says that y believes/says that z believes/says that …」と、被伝達文を埋め込む操作を無限に繰り返すことができ、被伝達部の著者(=元発話者)が誰なのかに応じて *De Se* と *De Re* の解釈が決まることになる。

同じことは時制にも当てはまる。時制にも発話時基準の<絶対的テンス>、主節時制に相

対的なく<相対的テンス>以外に、埋め込み節が独自の時制を示す場合がある。<絶対的テンス>は *De Dicto*、<相対的テンス>は *De Re*、そして埋め込み節独自の時制は *De Se* にそれぞれ対応すると考えられる。(1a, b) (2b) (3b) は<相対的テンス>を表す *De Re* 解釈、(2a) (3a) は埋め込み節独自の時制を表す *De Se* 解釈の例である。

- (1) 太郎は[花子が{a. 買った/b. 買う} 本]を読んだ
- (2)a. 太郎は[昨日たくさん食べる]から、お腹が痛くなったのだ。
b. 太郎は[昨日たくさん食べた]から、お腹が痛くなったのだ。
- (3)a. 福井交通の運転手は[越前海岸で自殺した女性]をそこまで乗せて行った。
b. 福井交通の運転手は[越前海岸で自殺する女性]をそこまで乗せて行った。

埋め込み節の述語がタ形の(1a)には、埋め込み節事象が主節事象に先行する<埋め込み事象先行型>の読みが成立し、埋め込み節の述語がル形の(1b)には、主節事象が埋め込み節事象に先行する<主節事象先行型>の読みが成立する。ただし、どちらの例も埋め込み節の時制は<相対的テンス>である。しかし、(2a)では埋め込み節の述語がル形であるにも拘らず、<埋め込み節先行型>の解釈が成立し、また(3a)ではタ形であるにも拘らず、<主節先行型>の解釈が成立する。どちらの例も、主節事象の時制とは無関係に埋め込み節独自の時制を示すという点では logophor と同じである。これが *De Se* 解釈を持つと言わ

れる所以である。ただし、(当該時制が評価されるべき)〈パースペクトの一貫性〉という観点から見れば、報告文同様、埋め込み節の時制が主節とは無関係に独自の *De Se* 解釈を持つことは好ましいことではない。事実、日本語の埋め込み節の殆どは *De Re* 解釈/〈相対的テンス〉を示している。それにも関わらず、埋め込み節の時制が *De Se* 解釈を持つ場合があるのはどう考えればよいのだろうか。本論では、*De Se* 解釈を持つ事例を対象に、日本語の埋め込み節における時制形式の選択と解釈の関係を文脈/パースペクト、より具体的には、〈著者〉(=元発話者)パラ미터のシフトの有無に関連づけて考察する。

日本語の埋め込み節の時制については、日本語学分野だけでなく、時制論理や意味論の研究においても、絶対的テンスと相対的テンスの二元論で繰り返し論じられてきた。その中には、文脈依存的に指示対象が決定される指標要素を伴った時制演算子を仮定し、それぞれの時制演算子が文脈に則して個別に評価されるとする Kusumoto (2005) の意味論的なアプローチもある。また、日本語学の研究では、南(1974)が、主語、時制形式、主題、モダリティ要素との共起を基準に節に A 類(描叙段階)、B 類(判断段階)、C 類(提出段階)、D 類(表出段階)の区別を設け、相対的テンスは B 類節に現れると言う。したがって、(2a) の名詞補文や(3a) の関係節は、相対的テンスのときには B 類節に、埋め込み節独自の時制 (*De Se* 解釈)を示すときにはモダリティ要素と同じ C 類節に分類されることになる¹。実際、(2a, b) (3a, b) の埋め込み節の主動詞にモダリティ要素を付加すると、下に示すように、モダリティ要素との共起可能性が異なることが分かる。

¹ 埋め込み節時制と南(1974)の従属節の階層構造との関係、および、統語論分野で議論されているモダリティ要素の統語構造上の位置との関連については別稿で論じる。

- (2)' a. 太郎は[勉強しないに違いないから]、試験に落ちた(のだ)
 (3)' a. 福井交通の運転手は[越前海岸で自殺したに違いない女性]をそこまで車に乗せて行った。
 (2)' b. *太郎は[勉強しなかつたに違いないから]、試験に落ちた(のだ)
 (3)' b. *福井交通の運転手は[越前海岸で自殺するに違いない女性]をそこまで車に乗せて行った。

De Se 解釈を示す(2a) (3a) の埋め込み節はモダリティ要素「に違いない」と共起するが、*De Re* 解釈を示す(2b) (3b) の埋め込み節はモダリティ要素と共起できないことが見てとれる。つまり、a 文の埋め込み節は C 類節、b 文の埋め込み節は B 類であるということになる。

では、(2) (3) の a 文と b 文をもう少し詳しく見てみよう。まず、(2b) ではカラ節の内容は地の文の一部として解釈される。しかし、発話者がカラ節の記述内容を知っている/信じているかどうかは不明である。一方、(2a) ではカラ節の内容は発話者の知識に基づいた注釈として解釈される。また、(3a) でも発話者は実際に関係節の内容を知って/信じており、関係節は発話者の知識に基づいた注釈として解釈される。一方、(3b) では関係節の内容は地の文の一部として解釈される。しかし、発話者が関係節の記述内容を知っている/信じているかどうかは不明である。埋め込み節が独自の時制を示す a 文は *De Se*、相対的テンスを示す b 文は *De Re* と考えられる。

本論では、埋め込み節が独自の時制を示す *De Se* は、文脈/パースペクト・シフトの結果生じる読みであり、特に、〈著者パラ미터〉が重要な要因となることを示す。以下ではまず、議論の背景となる報告文における *De Re* 解釈と *De Se* 解釈が生じる背景を logophoric pronoun の[自分]を使って簡単に示し、*De Se*

解釈は主文主語と埋め込み節の著者パラメーターが一致する場合に生じることを見る。ところが、埋め込み節の時制にが生じるのは、埋め込み節と主節間で著者パラメーターが一致しない場合であることを示す。その上で、一見 *De Se* 解釈にそぐわない著者パラメーターを示す埋め込み文が、実際にはより深い埋め込み構造を持つことを示して、むしろ、*De Se* 解釈は、埋め込み節における主節の著者のパラメーターの上書きを行う文脈/パースペクト・シフトの問題として捉えられる現象であるということを見る。その結果、埋め込み節の時制の *De Se* 解釈は、Kusumoto (2005) が主張するような時制演算子を仮定しても説明できないこと、むしろ、文脈/パースペクト、中でも著者パラメーターのシフトが重要な要因であり、logophoric pronoun の“同じ文脈/パースペクトに属する要素は全て同じ文脈に属する”という〈shift-together constraint〉により説明されるということを示す。

2. 報告の報告

既に触れたとおり、報告文には(i)他者の発話をそのまま報告する *De Dicto*、(ii)発話者が現実世界の出来事を報告する *De Re*、(iii)報告される信念や発話の元話者である一人称(「自分」)の視点から報告する *De Se* の3タイプの報告文がある。次の例を見てみよう。

- (4) 太郎は[{a. 彼が/b. 自分が} キスした女の子]にキスしなかったと信じている/言っている。

まず (4a) は *De Se* 解釈を持ち得ない。*De Se* では、「キスした」は太郎自身が知っていることであり、それを自分で否定することは、矛盾することになるからである。むしろ、

(4a)には(4')のような解釈が可能であり、その場合、*De Re* 解釈が容認される。(4')では、「キスしなかった」は太郎の信念に帰属するが、「キスした」は(silent な)話者の信念に帰属する狭い解釈を持ち、互いに排除し合わない。一方(4b)には、*De Re* 解釈のみが可能である。ただしその場合には、自分が知っている事実を自分で否定するという矛盾が生じることになる。

- (4') (私は[太郎は[彼がキスした女の子]にキスしなかったと信じている]ことを信じている)。

このように、*De Se* 解釈は、(4b)のように、埋め込み節中の logophoric pronoun「自分」が主文主語の「太郎」と同一指示的である場合にのみ生じる。そこで、*De Se* 解釈を得るための条件を次のように規定することができる。

- (5) Shift-Together – 同じ文脈/パースペクトに属する要素 α 、 β は、同じ文脈/パースペクトに基づいて評価されなければならない：

- a. $C_A [\dots \text{Modal}_1 C_B \dots [\alpha_{(A/B)} \dots \beta_{(A/B)}]]$
 b. * $C_A [\dots \text{Modal}_1 C_B \dots [\alpha_{(B/A)} \dots \beta_{(A/B)}]]$

これは、logophoric pronoun の“同じ文脈に属する要素は全て同じ文脈に属さなければならない”という〈shift-together constraint〉に対応するものである。

しかし、前節で見たように、時制の *De Se* 解釈を認可する埋め込み節の著者(=元発話者)は(silent な)発話者である。silent な発話者が文表層に現れることはない。そのため、表層構造の上では、(5b)のパターンを示すことになり、*De Se* を予測できないということになる。それでは、(2a)(3a)の関係節・カラ節における時制の *De Se* 解釈はどのようにして生じるのだろうか。

3. 埋め込み節の時制と〈Shift-Together Constraint〉

既に触れたように、埋め込み節の時制にも、*De Dicto*、*De Re*、*De Se* 解釈の3つがある。*De Dicto*は発話時基準の絶対的テンス、*De Re*は主節時基準の相対的テンス、そして、*De Se*は埋め込み節独自の時制を表す。次の例を見てみよう。(6)は*De Re*解釈を持つ。

(6) 太郎は[花子が{買った/買う}本]を読んだ

このとき、日本語の埋め込み文に現れるル形・タ形はどちらも固有の時制を持たず、研究者によっては、ル形は未完了、タ形は完了のアスペクトを表すとも言われる。(7)はOgihara(1996:134)による埋め込み節の相対的テンスを一般化した規則である。

(7) The SOT (sequence of tense) rule:
If a tense feature B is the local tense feature of a tense feature A at LF, and A and B are occurrences of the same feature (i.e., either [+past] or [+pres]), A and the tense associated with A (if any) are optionally deleted. N.B.: (i) The tense features include [+past] and [+pres] and nothing else. (ii) A tense feature A is “in the scope” of a Tense feature B iff B is associated with a common noun and asymmetrically c-commands A, or B is associated with a tense or a perfect and asymmetrically commands A. (iii) A tense feature B is the local tense feature of a tense feature A iff A is “in the scope” of B and there is no tense feature C “in the scope” of B such that A is “in the scope” of C.

ところが、次の(8)は(i)結婚が社長就任に先行する読みと(ii)社長就任が結婚に先行する読みを持ち曖昧である。この曖昧性をSOT規則は予測し説明することができない。

(8) 花子は社長になった男と結婚した。

同様に、三原(1992)の「視点の原理」も(8)を説明できない点では(7)と同じである。

(9) [視点の原理] :

- a. 主節と従属節が同じ時制形式であるとき、従属節のテンスは発話時との時間的前後関係で決まる(絶対的テンス)。
- b. 主節と従属節が異なる時制形式であるとき、従属節のテンスは主節時との時間的前後関係で決まる(相対的テンス)。

(9)は(8)の(ii)の読みを予測するが、(i)の読みを予測することはできない。これに対して、Kusumoto(2005)は、日本語の埋め込み文に現れる動詞が固有の時制を持たないことから、(8)に次のようなS構造を仮定することを提案する。

(10) [_{TP} t* PAST λ₂ past₂ [_{VP} Hanako marry [_{NP} a [_{N'} man [_{CP} who_i [_{TP} t* PAST λ₃ past₃ [_{VP} e_i become the president]]]]]]]

(10)では、過去時制演算子のPASTが文脈依存的に指示対象を決定する指標要素 t*を伴うため、それぞれのPASTが個別に評価されることになる。これを(8)に適用すると、結婚と社長への就任はどちらも発話時に先行することが示されているだけで、その生起順序については一切語らない。これは、(i)(ii)どちらの読みも排除せず、曖昧性の予測可能性を有することになる。このよう

に汎用性のある分析の利点は、(3)に言語上の曖昧性を前提しなくても、(3)と(2)を同じように分析できる点にある。しかし、汎用性があるということは、冒頭の(2a)(3a)と(2b)(3b)とのニュアンスの違いが説明できない、ということでもある。

そこで、*De Se* 分析を適用してみよう。まず(3a)に*De Re*解釈を適用すると「自殺してから車に乗せた/試験に落ちた後勉強しない」という誤った解釈を得る。「車に乗った」ことが成立する世界に(同じ人物が)「自殺した(=死んだ)」を埋め込むという矛盾が導出されるからである。(2a)も同じである。そのため、*De Re* 解釈が成立するためには「自殺した/勉強しない」を「自殺する/勉強しなかった」に言い換える必要がある。こうして出来た文が(2b)(3b)である。これに対して、*De Se* 解釈を適用すると、(2a)(3a)は問題なく容認される。*De Se* 解釈では、「車に乗った」「勉強しない」は主節主語ではなく(silent な)発話者の知識/信念に帰属する広いスコープを持つ。その結果、「自殺した」「試験に落ちた」が成立する世界に属する必要はないということになる。ところが、上で触れたとおり、(2a)(3a)の埋め込み節の著者(=元発話者)は(silent な)発話者である。そのため、(5)の制約に違反することになり、なぜ*De Se* 解釈を持つのかをうまく説明できない、という問題が生じる。しかし、(2a)ではカラ節は発話者の知識に基づいた注釈として解釈され、(3a)では関係節は発話者の知識に基づいた注釈として解釈されるという*De Se* のニュアンスはどこから生じるのか、それは、カラ節、関係節が、その記述内容を直接見聞きした silent な発話者を原著者とする著者パラメータを持つことが反映されたものであると考えられる。ただし、(5)の制約のままでは、(11)のような制約が生じることになり、silent な発話者が著者であるという状況で生じる *De Se*

解釈を、明確な形で捉えられなくなるということである。

(11) 発話文脈 C_A の直近の埋め込み節で文脈/パースペクトがシフトした場合、最も深く埋め込

まれた要素 α が C_A に基づいて評価されることは阻止される：

$$C_A [\dots AUTH_1 C_B \dots [\dots i_B \dots AUTH_2 C_C \dots [\dots \alpha_{(*A/B/C)}]]]$$

そこで、本論では、Shift-Together の基本的な考え方をさらに精密にして、信念文や報告文では、「[太郎は[花子が[PRO 大学をやめる]と言った]と言った]」のように被伝達部が主節直後の従属節よりもさらに深く埋め込まれた場合を考慮すると、(11)は(12)のように整備され、(2a)(3a)に*De Se* のニュアンスが生じることが説明できることを提案する。

(12) 発話文脈の直近の埋め込み節で文脈/パースペクトがシフトしても、最も深く埋め込まれた要素 α は同じ著者パラメータを有する文脈に基づいて評価され、 α が発話文脈に基づいて評価されることは阻止されない：

$$C_A [\dots AUTH_1 C_B \dots [\dots i_B \dots AUTH_2 C_C \dots [\dots \alpha_{(A/B/C)}]]]$$

(12)は被伝達部がより深く埋め込まれた場合に*De Se* 解釈が生じる条件を示したものである。ここには主節と埋め込み節がそれぞれ属する文脈だけでなく発話文脈も含まれている。その結果、(2a)(3a)のように silent な発話者のパースペクトも明示的に捉えることができるようになり、(2a)(3a)についても正しい予測をすることができるようにな

る²。

4. 時制形式と文脈/パースペクト・シフト

(2a) (3a) と (2b) (3b) の違いを示すと次のようになる。

(13)	<i>De Re</i>	<i>De Se</i>
(2a)/(3a)	✓	*
(2b)/(3b)	*	✓

(2a) (3a) と (2b) (3b) の違いは(11) と (12) の違いに反映されており、埋め込み節の原著者が誰なのかという著者パラミターに代表される文脈の異同が、その原因に他ならない。(2a) (3a)における埋め込み節の時制形式の選択は、評価文脈を同じくする要素の著者パラミターを同じにするためのパラミター・シフト、文脈シフトを示すと考えられる。このような考えは、情報の帰属を明らかにし、そうすることによってパースペクトの衝突を避けるのに役立つ。日本語は情報の帰属に敏感な言語であることを考えると、このことが<パースペクトの一貫性>を損なうものではない。このような本稿の分析結果は、包括的な時制分析における評価文脈の重要性と *De Se* 分析の有用性を強く示すものである。

参考文献

Kaplan, D. (1989) “Demonstratives” in J. Almog, H. Wettstein, and J. Perry

(eds.) *Themes from Kaplan*: 481-563, New York: Oxford University press.

Kusumoto, K. (2005) “Quantification over times” in *Natural Language Semantics* 13: 317-357.

三原健一(1992)『時制解釈と統語現象』, 東京: くろしお出版

南不二男(1974)『現代日本語の構造』, 東京: 大修館書店

Ogihara, T. (1996) *Tense, Scope, and Attitude Ascription*, Dordrecht: Kluwer.

² §1で触れたように、*De Se* 解釈を示す(2a) (3a)の埋め込み節はモダリティ要素と共起し、*De Re* 解釈を示す(2b) (3b)の埋め込み節はモダリティ要素と共起できないことから、南の従属節の階層構造では*De Se* 解釈を示す埋め込み節はC類節、*De Re* 解釈を示す埋め込み節はB類節に分類されることが分かる。南の階層が意味的なものなのか統語的なものなのかは不明であるが、両者が統語構造上異なる位置に生起する可能性が見てとれる。注1で述べたとおり、この問題についての議論は別稿に委ねたい。